

人生を支える 広大な大地

本多弘之
bonda hiroyuki

群萌

小生が学生生活を終る頃のことである。自己の深みにより確かな自己がある、というように自分を考えることもできなかつたし、自己の外に自分より確固たる自己の根拠があるなどとは、到底認めがたかつた。しかし、頼りないこの自分がこのままで社会で一人前に生きていける自信もなかつた。必死でどうしたら生きていけるのかを求めていたのであつたが、このままこの世から消えてしまひた

いという誘惑が、泡ぶくが沸き上がるように心の中に湧いてくるのであつた。

愚痴に帰って助かるのだというが、本当に人間の意識の転換というものは、まったくの偶然のような機縁によって与えられるものだと思う。ふと、畔道の辺に芽を出している雑草の、何でもないうような小さな姿が目にとまつた。目立たず自己主張もない小さな雑草の生命力が、不思議な迫力で、お前が感じている自己の生命のはかなさに対して、この俺の力を感じないか、とささやきかけてきたのである。考えること以前の、ただ生きていることに、深い信頼を持って、生命を支えている大地から呼び掛けられたといつてもよい。

最近の統計で、交通事故の死者数よりも自殺者の数の方が多いという。その数はしかし、その可能性の事実になる確率のことを思

えば、むしろその程度であることの方が不思議なほどの低い割合なのではないか。現代社会の生活空間には、自然の大地の生命が我らの個々の悩みにささやきかけるための、なんらかの手がかりになり得るものが、ほとんど無くなりつつある。自然環境それ自身が人工的なものになつていくし、人間がお互いに育てあい、触れ合つていく生活関係が、資本の働きに連なるような関係、すなわち会社とか商売とかの関係に限定されていつている。普通に人と人とが、「袖触れ合」うも他生の縁といわれるような、縁の催しのままに触れ合つていけるような信頼関係は、すでに崩壊しているのではないか。それは、たとえば列車や航空機の座席に数時間を隣り合つても、ほとんど会話すら交わさないのが当たり前になつていて、ことを思えば理解されよう。

都市生活者というが、互いに隣のことにも干渉せず、お互いの自由勝手な生活を謳歌できるといえば、ずいぶんとしがらみや義理に縛られている、いわゆる伝統的人間関係からの解放の面が喧伝されてきたものではあつたが、都市的生活空間が当たり前になつてみると、いままでの長い人間関係が築いてきた大切な事柄を破壊してしまつたことが、判然として

きた。人間は単に両親のいる家族だけによって育てられてきたのではなかった。祖父母や隣近所や、自然の恵みや、その町や村の歴史や伝統、要するに個人の存在を成り立たせている一切の背景を忘れて、「自我」が、あなたも「主体」なる自由意志としてのみ成り立つかのように考えることが、近代の進歩していく人間の方向であるとされてきた。その個人の育成の背景の目に見えない大きな用らさが自覚に上らなくなったのである。

こう書くと、筆者は近代以前に帰ることを理想とするように思われるかもしれないが、そういうわけではない。歴史の大きな流れは、決して元には帰らないし、先の時代にはまたそれなりの、人間にとつての問題があつたに相違ないのである。ただ、近代生活や都市生活が、あなたも理想の生活の方向と思われてきたことに、実は大きな落とし穴があつたといいたのである。

我々は、たしかに誰にも代わることができない一回かぎりの人生を生きている。「無有代者」といわれるこの人生は、身体に与えられた生命である。「我が身」といわれるこの身体は、理性や知性よりも根底的に、一回かぎりの人生の限定を受けとめている。身体があつてこそ「自我」も成り立つのであつて、逆ではない。その身体は「誰にも代われない」し、老・病・死の現実を引き受けて生きているの

である。

そして、身体が生きているのは、抽象的空間ではなく、具体的なこの地球上のある時、ある場所なのである。その身体は、あらゆる生命体の歴史と相なる所を持っていて、どれだけががんばろうとも、自然のいのちの限定のもとにあるのである。決して人間だけが特別扱いされてこの世に存在するのではない。この自然によって生み出され与えられた身体を場所としながら、人間には、理性というものが与えられたことにおいて、何か、特別な存在であるような傲慢不遜な考えが生じてしまったのである。

小生はふと出会った雑草によって、人間も一応は、単なる一生命体なのだと思ふかされた。そして、そのことにおいて、「群萌」といわれるような、この人生のあり方に対する見方に、深く感動することができたのだと思う。群萌と呼ばれてみると、呼び掛けてくる不可思議なる生命の泉が、こんこんとどこまでも

尽きる事無く、この命の深い大地の底からの力を教えてくれる。自我の思いなどを突破して、自己の根底が無始已来の命の営みの根源に連なり、そこから信頼されて一生の間、この身体を預けられているようなものだ。この根源からの呼び掛けを、本願の言葉として書き留めたものが、『無量寿経』の経説ではないか。これはしたがって、特定の教義字の

持ち物とすべきものでもないし、宗派の言葉に閉塞させてもならない。これをなんとかして、現代の取りつくしまなき都市生活者に、共通の大地として開示できないものか。どれほど個人的・閉鎖的・孤獨的生活であろうとも、「群萌」として大自然の命の一部を身体において感覚しているに違いないのだから、きつと手をつなぐ道があると思う。

現代の生活は、たとい田園に囲まれたように見えていても、電気製品や自動車を頼りとしていることはもとより、情報も生産手段もそしてなにより貨幣経済に巻き込まれていない生活空間などはない。それによって、村落共同体も家族の連帯意識も、伝承された生活習慣や宗教行事も、すべてが風化し忘れ去られていつている。その点では、遅かれ早かれ、現代の都市生活者の悲哀は、日本全土に行き渡るだろうし、もうすでにその風潮は行き渡ってしまっているともいえよう。

いまさら「首都圏」において、改めてなにを言い出そうというのかと、内外から怪訝の思いを投げられつつ、それでも何かせずにおれないというのは、この大地の声を表現するには、是非や効能などでなく、「大悲無倦」の本願の催しに促されているからである。どうか、暖かいご賛助をお願いすることである。

(ほんだ ひろゆき・真宗大谷派本龍寺住職)